

博士論文要約

『とりかへばや物語』研究

立命館大学大学院文学研究科
人文学専攻博士課程後期課程

シヨウ シヨウジュン

ZHUANG JIECHUN

1、目次

序章

第一章 「女の物語」の視点から見る『とりかへばや物語』

第一節 妊娠表現に関して

第二節 「家」に束縛される女君

第二章 ジェンダーコードの視点から見る『とりかへばや物語』

第一節 「走る」女主人公とその才学

第二節 「交じらふ」女主人公

第三章 日中比較文学の視点から見る『とりかへばや物語』

第一節 『とりかへばや物語』と「雌木蘭替父従軍」「女状元辞凰得鳳」等を中心に

第二節 『とりかへばや物語』と『玉釧縁』を中心に

翻訳 中国語訳『とりかへばや物語』

主要参考文献

2、全体の要旨

三章六節および付論で構成される本博士論文は、「女の物語」、「ジェンダーコード」と「日中比較文学」の三つの視点から、平安後期物語である『とりかへばや物語』のテキストにおける女性の造形とジェンダーの言説について多角的に考察するものである。

第一章では、平安時代文学における「女性」に関する言説の生成に注目し、「女の物語」というジャンルにおける、『とりかへばや物語』の継承と展開の意義を解明する。

第二章では、ジュディス・バトラのジェンダー理論を援用し、ジェンダーが社会によって構築された一種のパフォーマンスであるとするとする認識のもと、「男性的」「女性的」などと符号化される言説を一度解体し、当時の歴史的文脈から読み直すことで、女主人公のジェンダーに関する描写を改めて検証する。

第三章では、中国の異性装を題材とする文学作品を取り上げ、日中比較文学研究の視点から、「異性装」を構成する言説を分析することにより、『とりかへばや物語』の新たな解読の可能性を探りたいと考えている。

最後に付論として、新編古典文学全集を底本として、巻一前半で一六五頁〜一九九頁までを中国語訳したものを掲載している。これを端緒として中国語の全訳を完成させたいと考えている。

3、各章の要約

『とりかへばや物語』は平安時代後期の成立とされる、異性装をテーマにした物語である。異母兄妹である内向的な男主人公と外向的な女主人公が、本来の性とは異なる社会的な性別を付与され、やがてそれぞれに秘密をかかえて宮廷に出仕し、様々な事件に遭遇しながら、結局は生来の性に戻り、男主人公は閑白に、女主人公は中宮にと栄達するまでを描く物語である^①。

この物語はかつて、異性装のモチーフを扱うため、藤岡作太郎によって「その奇変を好むや、殆ど乱に近づく、醜穢読むに堪へざる」と酷評されていた^②。現在ではそうした認識は払拭され、この物語は、『源氏物語』から始まる、「焦点を女の方にしぼって、その人生の変転を辿った」「女の物語」であると指摘され、『源氏物語』から『夜の寝覚』へと連なる王朝物語史上の転換点に位置する重要な作品であると評価されている^③。

本博士論文は、「女の物語」、「ジェンダーコード」と「日中比較文学」の三つの視点から、『とりかへばや物語』のテキストにおける女性の造形とジェンダーの言説について多角的に考察するものである。

『とりかへばや物語』は、婚姻・妊娠・出産といった女性の人生における重要なできごとをめぐって、女主人公をはじめ、数人の女性の生を描いている。特に、女主人公には、秘密

の妊娠と出産を経験させているのである。『とりかへばや物語』と密接な関係をもつ『夜の寢覚』も、女主人公である中の君の突然の契りによる妊娠と秘密の出産を描いている。この展開について、「読み手の〈女〉たちが女主人公と我が身とを引き比べ、心情を想像し共感する「仕掛け」とする指摘があることは重要である^④。また、異性装の女主人公の性の配置に注目して、性の制度を権力の再生産システムの問題として論じられた木村朗子の「権力再生産システムとしての〈性〉の配置―『とりかへばや物語』から『夜の寢覚』へ」も注目される^⑤。

このような先行研究を踏まえ、第一章は、平安文学における「女性」に関する言説の生成に注目し、「女の物語」というジャンルにおける、『とりかへばや物語』の継承と展開の意義を解明する。

第一節では平安時代の物語における妊娠の言語表現を追究し、『とりかへばや物語』の妊娠表現は先行物語である『源氏物語』及び『夜の寢覚』を継承したものであることを明らかにし、異なる表現の使い分けが物語の展開に果たした重要な役割を解明する。第二節では、女主人公の婚姻・妊娠・出産に関する言説を、同じ時代の物語である『今昔物語集』巻二十七第十五話などと比較し、家父長制社会に束縛されつつもなお主体的に生きようとする女主人公の人物造形を明らかにする。その上で、これらは『とりかへばや物語』が拓いた女性に関する新たな表現の可能性とし読み取れるものであることを指摘する。

『とりかへばや物語』において「異性装」はいかなる意味を持つのであろうか。先行研究において、きょうだいたちのそれぞれのジェンダーは「男性的」「女性的」などと自明なもののように捉えられている。例えば、ジェンダーの視点から検討する先行研究に、菊池仁『『とりかへばや物語』試論―異装・視線・演技』（『日本文芸思潮論』一九九一年）、神田龍身「分身、交換の論理―『木幡の時雨』『とりかへばや』』（『物語文学、その解体―『源氏物語』「宇治十帖」以降』一九九二年有精堂 一九九一年初出）安田真一『『とりかへばや』の交換可能の論理―ジェンダー論の視座から』（『日本文学』四六二―一九九七年）などがある。いずれもきょうだいを一対のものとして扱い、その交換可能の論理を中心に論じるものである。第二章ではそれらとは方向性を換え、ジュディス・バトラーのジェンダー理論を援用し、ジェンダーが社会によって構築された一種のパフォーマンクスであるとする認識のもと、「男性的」「女性的」と符号化されている言説を一度解体し、当時の歴史的文脈から読み直すことで、女主人公のジェンダーに関する描写を改めて検証することを目的とする^⑥。

第二章第一節では、女主人公の「走る」身体動作および才学に関する描写を分析する。女主人公に異性装をさせる要因となる「走る」身体動作は、『源氏物語』や『虫めづる姫君』などから受容したものであり、それを「男性的ジェンダー」として定着させるのは『とりかへばや物語』であると考えられるのである。また、『とりかへばや物語』以前、才学のある女性は主役として登場することはないものの、『とりかへばや物語』が才学を思う存分發揮する女主人公を造形した影響を受けて、後の物語である『在明の別れ』・『我が身にたどる姫君』にはそのような女主人公像を享受、踏襲したものであることを考察する。

第二節では、「交じらふ」という語彙をめぐる女主人公、父左大臣と宰相中将それぞれの思いを分析し、『紫式部日記』と比較検討して『とりかへばや物語』の特質を解明した。父左大臣は、きょうだいたちの「異常」さを知りながらも、時勢に合わせて、きょうだいたちの「交じらふ」ことを決定することで、物語の展開を大きく推進している。女主人公は、自ら抱える秘密の露見を恐れるためだけでなく、自分自身のなかで「ひたおもて」なることに對する複雑な思いを抱えている。女主人公は、世人の認識とのずれはあるものの、自分の理解に基づく「世の常」を踏まえ、男主人公が「例の人」になつてほしいと切に願っていることを検証する。また、宰相中将が「世の常」を以って彼女の過去を否定することは、ついに二人の関係を破綻させてしまうことを指摘する。

社会学研究の成果と比較して、「異性装」を題材とする文学作品に関する比較研究は決して多くはない。特に、『とりかへばや物語』を主に取り上げた研究は、鈴木弘道の「とりかへばや物語と外国文学」と小田桐弘子の「男装女装物語比較考」との二篇のみである。鈴木弘道は「非直接的な関係に於ける比較研究」を目的とし、『とりかへばや物語』とシェークスピアの「十二夜」、アベ・ド・シヨワジー「女装粹人行状記」との類似性を検討し、世界文学の文脈のなかに『とりかへばや物語』を位置づける意義を提起している^⑥。小田桐弘子の「男装女装物語比較考」は、性役割交換の理由を分析し、世界の男装・女装物語に、中国・韓国・シェークスピア・古事記の日本武尊のような目的達成としてのマタイプ、そして『オランダ』と『とりかへばや物語』のようなロタイプに分類している^⑦。さらに、『とりかへばや物語』は人間が内有する「両性願望」「内なる異性」を語っていると指摘している。

以上の考証を踏まえ、第三章では中国の異性装を題材とする文学作品を取り上げ、日中比較文学の視点から、「異性装」を構成する言説を分析することにより、『とりかへばや物語』の新たな解読の可能性を探りたいと考えている。

第三章第一節では、残存する文学作品としては中国現存最古の異性装のモチーフを扱う戯曲である明代の徐渭（一五二一～一五九三）編『四聲猿』に所収される「雌木蘭替父從軍」および「女状元辞鳳得鳳」を比較対象として取り上げる。異性装しているにもかかわらず、「結婚」を通して、夫の「家」へ帰属することは両作品の女主人公に付与された共通の結末であった。また、女性の「結婚」に必要とされるものと貞操に対する強調は、異性装の女主人公に課せられた共通の束縛であると考えられる。しかしながら、歴史上の先例を引きつつ、意気揚々と才能を發揮し、周囲の支持を得て異性装に挑む中国の女主人公である花木蘭と黄春桃とに比較して、『とりかへばや物語』の女主人公は、異性装によってその才能を思う存分發揮して、世人に評価されながらも、「人に違ひける」身のため、常に暗澹たる思いを抱き続けている、という明確な相違があることを指摘する。

第二節では、「内容も形式からも以後の諸弾詞小説の基礎と成す作品」であると言われている明代末期の弾詞小説である『玉釧縁』を比較の対象として取り上げる^⑧。きょうだいの異性装と身分の交換という主題を共有しながら、『玉釧縁』の兄妹の異性装は服装というコードを変えることで自由に行き来できるのに対して、『とりかへばや物語』のきょうだいの

異性装は、心の問題を顕在化させる契機と捉えられること、また、従来の指摘と異なり、『とりかへばや物語』の異性装の核をなすのは、いかに男性的あるいは女性的なジェンダーを演じるのかを描くことではなく、異性装の決意をしてから、そのジェンダーを身に付ける努力をするという逆のプロセスを描くことであることを明確にしていく。さらに『とりかへばや物語』と『玉釧縁』は、「女の物語」として、女性の声無き反抗を描くことで、男性中心社会で定義される理想的な恋人の限界を暴く作品であることを検証する。

平安物語文学の頂点である『源氏物語』は、豊子愷と林文月など有名な翻訳者によって十数種類の中国語訳が存在しているに比べて、「男装」と「女装」という男女双方の越境を語る平安末期物語である『とりかへばや物語』は、中国ではほとんど紹介されていない。一九二九年に出版された謝六逸によって編纂された『日本文学史』に、わずかに数行の紹介があるだけである^⑧。最後に付論として、新編古典文学全集所収本文を底本として、巻一前半一六五頁から一九九頁までのテクストを中国語訳したものを付している。これを契機に中国語の全訳を完成させ、出版したいと考えている。

注

- ①『とりかへばや物語』は古本と今本とがあるが、現存するのが今本である。本論文はそれを考察対象にする。また、男君と女君はどちらが年上かはっきりしていないため、本論文では「きょうだい」と表記する。
- ②藤岡作太郎『国文学史 平安朝篇』（一九〇五年東京開成館「東洋文庫」一九七一年平凡社）
- ③辛島正雄『今とりかへばや』の定位（『堤中納言物語 とりかへばや物語』一九九二年岩波書店）、星山健「王朝物語史上における『今とりかへばや』―「心強き」女君の系譜、そして〈女の物語〉の終焉―」（『王朝物語史論―引用の「源氏物語」』二〇〇八年 笠間書院）
- ④宮下雅恵「〈女のカタログ〉―女たちの共感装置としての『夜の寝覚』―」（『中古文学』第九十六号 二〇一五年）
- ⑤木村朗子「権力再生産システムとしての〈性〉の配置―『とりかへばや物語』から『夜の寝覚』へ」（『恋する物語のホモセクシュアリティ 宮廷社会と権力』二〇〇八年 青土社、二〇〇二年初出）
- ⑥ジュディス・バトラーは『ジェンダートラブル―フェミニズムとアイデンティティの攪乱―』（ジュディス・バトラー著、竹村和子訳、青土社 一九九九年）において、以下のように指摘している。

ではジェンダーは、どんな意味で行為なのか。他の儀式的な社会ドラマと同様に、ジェンダーの行動には、反復されるパフォーマンスが必要である。この反復は、すでに社会的に確立されている一対の意味の再演であり、同時に再経験である。それはその意味

を合法化するための、日常的で儀式的な形態である。男や女のジェンダーに様式化されることによって、それらの意味を演じるのは個々の身体なのである。しかしこの「行動」は公的な行動でもある。その行動には時間的、集団的な広がりがあり、この公的性質はけつして瑣末なものではない。事実パフォーマンスは、ジェンダーを二元的枠組みのなかに保持しようとする戦略的な目標——主体に帰せられる目標ではなく、むしろ主体を基礎づけ強固にする目標と理解すべきもの——のもとに、おこなわれているのである。

(二四六頁〜二四七頁)

⑦ 鈴木弘道「とりかへばや物語と外国文学」『論究日本文学』七号、一九五七年)

⑧ 小田桐弘子「男装女装物語比較考」『福岡女学院大学紀要』第七号、一九九七年)

⑨ 鮑震培『清代女作家彈詞研究』南開大学出版社二〇〇八年

⑩ 替換物語…作者已不傳, 内容记权入納言有男女孩子各一, 男孩的性格像女子, 女孩的性
格像男子; 遂將男孩当作女孩養成, 將女孩当作男孩養。原作以记他们一生的经过为主, 并穿

插着恋愛的故事。『日本文学史 上』北新书局一九二九年一一七頁より引用。試訳:『とりかへばや物語』…作者は不明であり、内容は、権大納言に男女の子供一人ずつおり、男の子の性格は女の子に似て、女の子の性格は男の子に似る。従って、男の子を女の子のように育て、女の子を男の子のように育てると記している。原作は彼達の人生経歴を描くのを主として、恋愛の物語も交錯している。)

4、成果のまとめ (結果・考察)

以上、総合的な視点から、同時代の文学作品および中国の異性装物語と合わせて検証すること、**「女の物語」**である『とりかへばや物語』が、異性装というモチーフを生かすことで拓いた表現の世界の一端を解明する。今後はさらに、中世王朝物語に対する影響および世界文学の「女の物語」の系譜を関連させて、さらなる考察を続けたいと考えている。

5、主な引用文献・参考文献

日本語文献

『平安末期物語の研究—夜半の寢覚・濱松中納言物語・とりかへばや物語論攷』鈴木弘道
一九六〇年 初音書房

『平安末期物語論』鈴木弘道 一九六八年 塙書房

- 『とりかへばや物語—本文と校異』 鈴木弘道 一九七八年 大学堂書店
- 『色好みの構造—王朝文化の深層』 中村真一郎 一九八五年 岩波書店
- 『とりかへばや、男と女』 河合隼雄 一九九一年 新潮社
- 『物語文学、その解体—『源氏物語』「宇治十帖」以降』 神田龍身 一九九二年 有精堂
- 『ジェンダートラブル—フェミニズムとアイデンティティの攪乱—』 ジュディス・バトラ
—著 竹村和子訳 一九九九年 青土社
- 『語りかける記憶—文学とジェンダー・スタディーズ』 中川成美 一九九九年 小沢書店
- 『中世王朝物語史論』 辛島正雄 二〇〇一年 笠間書院
- 『源氏物語—性の迷宮へ』 神田龍身 講談社 二〇〇一年
- 『今井源衛著作集二』 王朝末期の物語』 今井源衛 二〇〇六年 笠間書院
- 『王朝物語史論—引用の『源氏物語』』 星山健 二〇〇八年 笠間書院
- 『恋する物語のホモセクシュアリティ 宮廷社会と権力』 木村朗子 二〇〇八年 青土社
- 『乳房はだれのものか—日本中世物語にみる性と権力』 木村朗子 二〇〇九年 新曜社
- 『「女装と男装」の文化史』 佐伯順子 二〇〇九年 講談社
- 『夜の寢覚論—〈奉仕〉する源氏物語』 宮下雅恵 二〇一一年 青簡舎

中国語文献

- 『弾詞叙録』 譚正璧 一九八一年 上海古籍出版社
- 『性別越界』 張小虹 一九九五年 聯合文学
- 『性帝国主義』 張小虹 一九九八年 聯合文学
- 『中國婦女与文學論文集』第一集・第二集 吳燕娜編著 魏綸助編 一九九九年 稻郷出版社
- 『物・觀看・性別—明末清初文化書写新探』 毛文芳 二〇〇一年 台湾学生書局
- 『同志研究』 何春蕤編 二〇〇一年 巨流圖書公司
- 『才女徹夜未眠—近代中国女性叙事文学の興起』 胡曉真 二〇〇三年 麥田出版
- 『明清婦女之戲曲創作与批評』 華璋 二〇〇四年 中央研究院中國文哲研究所
- 『閨塾師—明末清初江南的才女文化』 高彦頤 江蘇人民出版社 二〇〇六年
- 『後現代／女人—権力、欲望与性別表演』 張小虹 二〇〇六年 聯合文学
- 『中国古典小説女性形象源流考論』 馬珏坪 二〇〇六年 南京師範大学出版社
- 『清代女作家彈詞研究』 鮑震培 二〇〇八年 南開大学出版社
- 『中国古代文学与文化的性別審視』 陳洪・喬以鋼等著 南開大学出版社 二〇〇九年
- 『浮現中的女同性恋—現代中国的女同性愛欲 = The emerging lesbian : female sama-sex desire in modern China』 桑梓蘭著 王晴鋒訳 二〇一四年 國立台湾大学出版中心

英語文献

- 『*A Study and Translation of the "Torikaebaya Monogatari"*』 Rosette Friedman Willig
一九七八年 University of Pennsylvania
- 『*The Changelings: A Classical Japanese Court Tale*』 Rosette Friedman Willig 一九
八三年 Stanford University Press
- 『*No Man's Land: The Place of the Woman Writer in the Twentieth Century : The War
of the Words*』 Sandra M. Gilbert Susan Gubar 一九八八年 Yale University Press
- 『*No Man's Land: Sexchanges v. 2: Place of the Woman Writer in the Twentieth Century*』
Sandra M. Gilbert Susan Gubar 一九八九年 Yale University Press
- 『*Vested Interests: Cross-Dressing & Cultural Anxiety*』 Marjorie Garber 一九九一年
Routledge
- 『*Frictions of Femininity: Literary Inventions of Gender in Japanese Court Women's
Memoirs*』 Edith Sarra 一九九九年 Stanford University Press
- 『*The Madwoman in the Attic: The Woman Writer and the Nineteenth-Century Literary
Imagination*』 Sandra M. Gilbert Susan Gubar 1/000年 Yale University Press
- 『*Epistemology of the Closet*』 Eve Kosofsky Sedgwick 1/000年 University of
California Press